

Feel the NCGM Plus



国立研究開発法人
国立国際医療研究センター

NCGM通信

2023.12.21

Vol.9

9月～11月（季刊）



授賞式後の記念撮影

(左から)木村救命救急センター長/竹村医師/長瀬副看護師長/山田副院長/牛込消防署職員2名

9月4日、センター病院は救急業務への貢献に対し、牛込消防署から感謝状が授与されました

感謝状の受賞理由は、多年にわたり救急行政に深い関心と理解を示し、その推進に協力するなど、救急業務の充実発展に多大な貢献をしたものです。

東京消防庁救急部長と牛込消防署長から、牛込消防署員及び木村救命救急センター長、佐藤看護部長より推薦された以下職員へ感謝状が授与されました。

牛込消防署長賞：山田 和彦 副院長

竹村 信行 医師

長瀬 慈 7階東病棟副看護師長

※救急部長賞を受賞した福島 憲治 第三救急科医長は欠席

7月20日、NCGM-PMDA共催シンポジウム ～The 2nd ARISE-PMDA Joint Symposium for Asian Clinical Trials～が開催されました



集合写真

NCGMは、日本医療研究開発機構（AMED）の支援を受け、アジアにおける国際共同臨床試験を推進するための基盤であるARO Alliance for ASEAN and East Asia（ARISE）を令和3年12月に発足させました。

アジアの薬事規制に準拠した質の高い国際共同臨床試験を実施するためには、アカデミアや企業の研究者だけでなく、各国の規制当局との緊密な連携が必要です。アジアにおける規制調和を推進するため、NCGMはPMDAとシンポジウムを継続的に共催しています。

第2回目となる今回は、アジア、欧米、アフリカ地域から14カ国、総勢376名が参加しました。

開会挨拶で国土理事長は、「製品の研究開発における国際保健協力は、政府指導者、規制当局、アカデミア、産業界にとって重要であり、優先事項とすべきである。そうすることで、将来、保健緊急事態に直面しても対応できる社会を構築することができる。」と述べました。

「医療研究開発における最新の薬事規制戦略」をテーマとする基調講演では飯山インターナショナルトライアル部長がARISEネットワーク活動を通じたアジア臨床研究協力を紹介しました。

「アジアにおける臨床試験をめぐる規制問題」、「臨床試験における新しいツールとアプローチの利用」、「アジアの臨床試験におけるFirst Patient In（FPI）」の3つセッションでは、製薬企業、アカデミア、規制当局の視点から、課題や取り組みについての発表が行われました。



国土 典宏 理事長



飯山 達雄
インターナショナルトライアル部長

インターナショナルトライアル部リージョナルマネージャーのMs. Marlinang D. Siburianは、東南アジア諸国におけるFPIに対する様々な障壁や課題について発表し、特にFPIに影響を与える要因や各要因における国ごとの違いを明らかにしました。

最後に、杉浦臨床研究センター長を座長とするパネルディスカッションが行われ、アジアにおけるFPIと承認を加速するために、アカデミア、規制当局、産業界がどのように連携協力して障害に対処できるかが議論されました。その結果、関係者間でのコミュニケーションを促進することで規制調和を図り、薬事承認を加速させていくこと、また、ARISEが今後も規制当局、アカデミア、産業界を集め、臨床試験に関する課題を議論していくことを希望する旨が表明されました。



杉浦 亙 臨床研究センター長



Siburian
リージョナルマネージャー

8月18日～22日、「世界蚊の日」の関連ポスターをセンター病院アトリウムで展示しました

1897年に英国の医師ロナルド・ロス卿が、マラリアが蚊で感染することを実証したことを記念して、8月20日は英名で「World Mosquito Day」とされています。

この発見により、ロスは1902年にノーベル生理学・医学賞を受賞しました。

狩野繁之部長（熱帯医学・マラリア研究部）は「蚊という世界最恐の人殺し生物が媒介することで、マラリアやデング熱をはじめとする感染症の脅威が現在も続き、我が国にも拡散してくる可能性があることを強く認識して欲しい」とメッセージを発信しました。

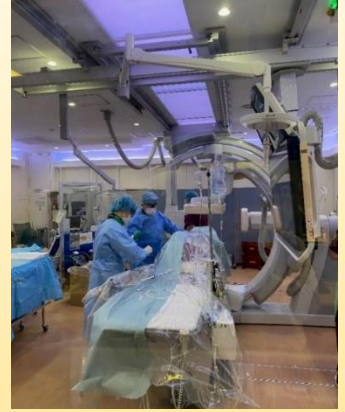


展示された啓発ポスターと「蚊」を題材にした狩野部長筆の書作品

センター病院診療科シリーズ No.8

循環器内科

循環器内科では急性心筋梗塞、高血圧緊急症、心不全などの急性疾患から慢性疾患まで12名のスタッフで対応しています。外来には胸痛、動悸、失神、めまい、足のむくみなどの主訴や、健康診断での心電図異常、血圧高値、手術前の心臓評価などで多くの患者さんのご紹介をいただいております。BNP、D-dimerなどの血液検査、心電図(運動負荷、ホルター)、24時間血圧計、血圧脈波、心エコー(経食道)、血管エコー、冠動脈CT、心筋シンチグラフィ、心臓MRI、心臓PETなど、入院では心血管カテーテル検査、経皮的冠動脈形成術(ロータブレーター、ダイヤモンドバック、血管内石灰化破砕術)、カテーテルアブレーション、ペースメーカー植込み(リードレス)、大動脈内バルーンポンピング(IABP)、経皮的心肺補助装置(PCPS, ECMO)、経皮的補助人工心臓(IMPELLA)を用いた心不全治療を行なっています。心臓血管外科と良好に連携し、冠動脈バイパス術、弁形成術、弁置換術の適応患者さんを紹介しております。



来年度に経カテーテル的大動脈弁植え込み術(TAVI)、経皮的僧帽弁クリップ術(MitraClip)などを施行するハイブリッド手術室が完成する予定です。

患者さんは病状が安定したところで、紹介元で治療の継続をお願いしております。よろしくお願いたします。
(循環器内科長 廣井 透雄)

10月2日、国立東京第一病院の2代目院長を務めた、坂口康蔵先生の資料を展示しました 広報企画室 沖田 恭祐

1946(昭和21)年3月20日から1956(昭和31)年12月1日まで、NCGMの前身にあたる国立東京第一病院の2代目院長を務めた坂口康蔵先生の資料を、センター病院地下一階アトリウムにあるレストラン「スエヒロ」横に展示しています。

今回の展示ではGHQ、戦後の栄養失調や感染症に関連する資料を3点展示しております。展示資料から医学史の流れや78年前にも同じ場所で現在のNCGM職員と同じように奮闘していた医師たちがいたことを感じていただければ幸いです。



展示の様子



坂口先生の紹介



泌尿器科では主に尿路に関する悪性および良性疾患を取り扱っております。悪性疾患は前立腺癌、膀胱癌、腎盂・尿管癌、腎癌、精巣癌などが対象です。ロボット手術を2016年7月から開始しており、積極的にロボット手術や腹腔鏡手術、内視鏡手術を行っております。最近、ロボット支援腎摘除術、ロボット支援

腎尿管全摘除術を開始しました。良性疾患では尿路結石症、副腎腫瘍、前立腺肥大症に対する手術を行い、特に副腎腫瘍は内分泌・副腎腫瘍治療センターの一員として主に腹腔鏡およびロボット手術による副腎摘除を担当します。また尿路結石症の手術として体外衝撃波（ESWL）、経尿道的治療（TUL）、経皮的治療（PNL）およびTULとPNLの同時手術とすべてのモダリティを備えております。外来では上記の癌に対して化学・免疫療法を積極的に行い、上記疾患のほかに過活動膀胱、尿路感染症なども取り扱っております。また院内では排尿ケアチームの一員として尿道カテーテル挿入中の入院患者さんの排尿問題に取り組んでおります。

（泌尿器科診療科長 宮崎 英世）

NCGM職員の著書紹介

バーコード／RFIDの活用と医療DX

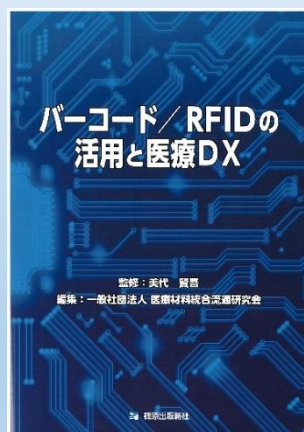
美代 賢吾 医療情報基盤センター長 ◆監修

本書は、医療DXの一環として、これからバーコード／RFIDの活用を検討しよう、活用を始めてみたい、という医療機関に向けた内容で構成しています。バーコードやRFIDを理解するための基礎的な内容から、病院に導入する際の考え方や工夫、そしてNCGMを含

めて、先進的な取り組み事例も紹介しています。

診療現場の負担軽減や医療安全の確保のため、医師や薬剤師、看護師など様々な職種の方にも参考にしていただきたいと思えます。

編集：一般社団法人 医療材料統合流通研究会



篠原出版新社
2023年08月初版

センター病院診療科シリーズ No.10

呼吸器内科

当科では、肺悪性腫瘍、気管支喘息、COPD、急性呼吸不全、間質性肺疾患から結核に至るまで多岐にわたる疾患に対し、それぞれをサブスペシャリティーとした専門医を揃え、呼吸器疾患全般にわたる深い知識と豊富な経験を有した多くのスタッフが診療にあたっています。



また、国際共同治験や他施設共同研究を積極的に行っており、それらを含めた最新医療の提供を行っています。

特殊診断検査としては、局所麻酔下胸腔鏡に加えて、気管支鏡検査では超音波気管支ガイド下針生検（EBUS-TBNA）や凍結生検（クライオバイオプシー）による正確な診断が可能です。また治療内視鏡としては、硬性気管支鏡を用いたステント治療のほか、重症喘息患者を対象とした気管支熱形成術（サーモプラスティ）では他施設に追随を許さない症例数実績を誇ります。さらに、咯血に対する気管支動脈塞栓術などのインターベンション治療にも力を入れており、多数の御紹介を頂いています。肺癌診療においてはオンコメインなどを用いたprecision medicineを実践し、外科・放射線科など他診療科との密接な連携のもと複雑な合併症患者にも対応しています。

高齢化社会を迎え、呼吸器疾患で困っておられる方がますます増え続けています。呼吸器関連の診療でお困りの際は、どんなことでも結構なので、お気軽にご相談ください。

（呼吸器内科診療科長 放生 雅章）

研修医の窓

小児科クリスマスコンサートを開催します！

センター病院 初期臨床研修医1年目・藤井 沙帆

NCGM小児科病棟では入院中の子どもたちのためにさまざまなイベントを開催しております。

毎年クリスマスには研修医主催のクリスマスコンサートを開催しており、今年も開催予定です。

小児科病棟には0歳の赤ちゃんから高校生まで、そして感染症のみならず、白血病などの小児がんの子どもたちまで幅広い患者さんが入院しています。友達にも会えず中には家族とも離れて入院している子もいます。

そうした子どもたちは多くの不安や寂しさを抱えていることかと思えます。

私たちが楽しいイベントを企画す

ることによって、少しでもそうした不安や寂しさを解消できたらと思っています。

今年は8人の研修医が参加します。子どもたちが楽しい時間を過ごすことができるように私たちが精一杯盛り上げようと思います。

病棟の先生方や看護師の方々、ホスピタルプレイスペシャリストの方、保育士の先生など協力して下さる多くの方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。



← 昨年度の様子

センター病院診療科 シリーズ No.11

心療内科

心療内科はどのようなことをする診療科か、みなさんご存じでしょうか。「身体症状があるけれども身体疾患が否定されたときに受診するところ」というイメージがあるかもしれません。しかし、心療内科は内科の一部として「心身症」を診療する診療科として誕生しました。心身症は「身体疾患の発症や経過に心理社会的因子が密接に関与している病態」として定義されており、つまりストレスなどの心理社会的要因が関与する身体疾患を診療する診療科なのです。

心療内科の基盤となる心身医学では、全人的理解という言葉が用いられますが、心療内科の臨床で

も、単に「心」と「身体」のそれぞれを評価するだけでなく、両者の関連や、社会的要因なども含めた全体像を把握することが大切です。また、治療においても、単に心理療法を治療オプションとして持つというだけにとどまらず、例えば身体面に作用する薬剤であってもどのように使うか心身医学的な理解に基づいて工夫するといった病態のマネジメント全体を考えることが重要になります。

身体疾患の中でも、通常の治療に十分反応しない患者の中に心身症の病態をとっている方が隠れているとも言われます。心身症の病態が疑われる場合はどうぞご紹介いただければと思います。

(心療内科診療科長 菊地 裕絵)

NCGM職員の著書紹介

救急超音波診療ガイド [Web動画付]

木村昭夫 (編集担当理事) 救命救急センター長 (一社) 日本救急医学会 ◆ 監修

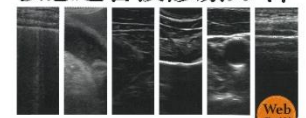
本書は日本救急医学会監修による、救急超音波診療テキストです。

手技や病態・疾患に関する画像・動画を豊富に盛り込み、独学でも知識と技術の習得に役立つ内容となっています。

また、救急科専門医・専攻医だけではなく、臨床研修医、広く急性期診療に従事する医療従事者の手引きとしても活用できるよう配慮しました。

編集：日本救急医学会Point-of-Care超音波推進委員会

救急超音波診療ガイド



【監修】 一社 日本救急医学会
【監修】 日本救急医学会 Point-of-Care 超音波推進委員会
【監修】 一社 日本救急医学会
【監修】 一社 日本救急医学会
【監修】 一社 日本救急医学会
【監修】 一社 日本救急医学会

本邦初
学会監修による
救急超音波診療テキスト

超音波
動画付

センター病院診療科
シリーズ No.12

眼科

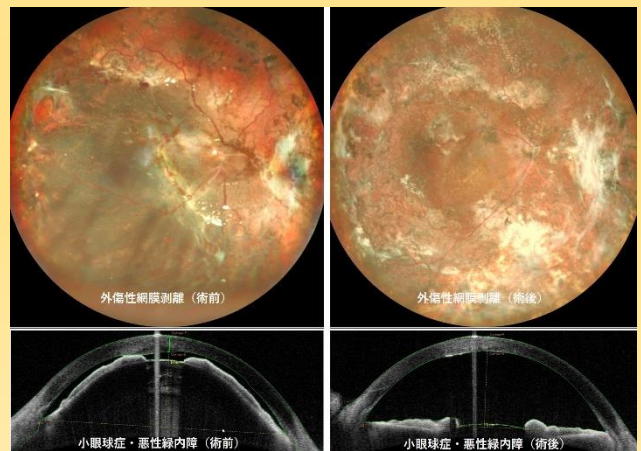
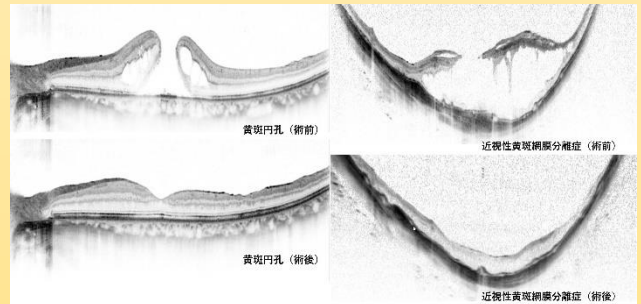
眼は小さな器官ですが、日常の情報量の約8割が眼から得られています。高齢者が現役として活躍することの多い現代社会で、視力障害はさまざまなトラブルの原因になります。三大失明疾患である緑内障、糖尿病網膜症、加齢黄斑変性の患者数は高齢化に伴い増加の一途をたどっています。失明を予防するためには早期発見と早期治療が重要で、当科は地域の先生方と連携して様々な疾患の診断と治療に携わっています。

外来には光干渉断層撮影、光干渉断層血管撮影、多局所ERGなどの検査機器を備え、感染性ぶどう膜炎の診断には前房水の網羅的PCR検査を行える診療体制（先進医療）を整えています。手術治療は外来手術（日帰り手術）を柱にし、今年度は約80%を外来手術で行っています。一般的な白内障だけでなく、難しい白内障、眼内レンズ脱臼、緑内障、網膜硝子体（黄斑円孔、黄斑前膜、増殖糖尿病網膜症、増殖硝子体網膜症）、眼瞼下垂症などの手術も行っています。また、頻度の少ない小児白内障、未熟児網膜症、真性小眼球、悪性緑内障、血管新生緑内障、近視性黄斑網膜分離などの難症例に対する手術治療も積極的に取り組んでいますので、治療にお困りの患者様がいらっしゃいましたらご相談ください。

研究面では前述の先進医療や希

少疾患のシスチン蓄積症の診断と治療の研究などに携わっています。治験協力として院内で施行されている11件（2023年11月現在）の治験の有害事象の診断に協力しています。教育面では6年前から厚労省が推進しているシーリング（医師数制限）の影響で、当科は基幹研修施設を取り下げ、関連研修施設として東京大学の医局から研修医をお受けして研修していただく体制になっています。様々な眼疾患の診療に携われるため、当科で研鑽を積まれた先生方は大学の指導者、主要病院の部長職で活躍されています。

（眼科診療科長 永原 幸）



研究所部門シリーズ No.15

肝炎総合対策は、2009年には肝炎対策基本法、2021年には肝炎対策基本指針（＝ガイドライン 約5年に1回改訂）が策定され、「肝炎撲滅(WHOは2030年を目標)」を推進しております。肝炎情報センターは、2008年11月に国府台病院敷地内の古い建物内に設置されました（2012年6月に4階建ての肝炎・免疫研究センターが完成し、現在はその1階にあります）。「肝炎診療の均てん化・医療水準の向上を全国的に推進する」「定期的に肝疾患に関する情報をアップデートし、正確な情報を広く発信する」ことを目標に、①インターネット等による最新情報提供②全国72カ所の肝疾患診療連携拠点病院間での情報共有（拠点病院）③拠点病院医療従事者研修を行っております。ホームページの月アクセス数は約10万件以上ののぼり、拠点病院間の連携を図るべく協議会を年2回開催、近年はweb併用ハイブリッド開催とすることで約200名が参加しています。また地方公共団体と連携を図るべく、毎年6カ所の地域に出向き情報共有をして

肝炎情報センター

おります（肝炎対策地域ブロック戦略合同会議）。

更に考藤センター長、是永は肝炎等克服研究政策事業の代表として、肝炎対策の評価や受検・受診促進の調査・研究を行い、国際学会誌に積極的に投稿することで（2020年～13篇）、わが国の優れた肝炎対策・センターの存在を世界に向けて発信しています。詳細は肝炎情報センターのホームページをご覧ください。（肝疾患研修室長 是永 匡紹）



肝炎情報センターのメンバー
前列（医師）左から：竹内上級研究員、是永、考藤センター長、山添上級研究員
後列（事務）左から：小山事務助手、魚住事務助手、新国研究業務係長、中上研究所事務助手

「World's Best Hospitals2023」の証書が センター病院に届きました

2023年、Newsweek社が世界28か国の8万人以上の医療従事者を対象としたオンライン調査などの独自調査によるランキングにおいて、国立国際医療研究センター病院は世界TOP250中73位、日本国内では5位にランクインしました。

これを受け、Newsweek社より「World's Best Hospitals2023」の証書が送られました。

本証書は、1F患者図書館に掲示をしております。
機会がありましたらご覧ください。



研究所部門シリーズ
No.14

免疫病理研究部

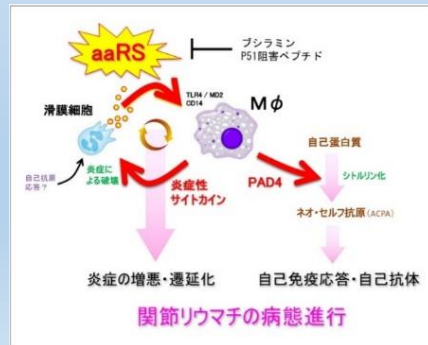
免疫病理研究部では、免疫関連疾患における病因、病態解明と新規治療法開発を目的とした基礎研究を行っています。特に「T細胞の分化」と「自己免疫疾患における慢性炎症」という2つのメインテーマに焦点を当てています。

ThemisというT細胞分化に必須の新しい遺伝子を世界に先駆けて発見し、その機能解析を行い免疫不全症や慢性皮膚炎症との関連を解明しました。また最近では、アミノアシルtRNA合成酵素（aaRS）という細胞内に普遍的に存在する蛋白質が、細胞外に放出されると強力なアラミンとして作用し、関節リウマチの病態悪化に重要な働きをしているとい

う意外な事実とその分子メカニズムを明らかにし、論文として発表しました（2023年、ARD誌：IF=28）。

このaaRSはリウマチを始めとした様々な自己免疫性慢性炎症疾患に対する新たな治療標的となる可能性があり、今後は新規治療法の開発にも貢献していきたいと考えています。

（部長 鈴木 春巳）



研修医の窓

臨床検査技師の皆さんと手技の勉強会を開催しました！

センター病院 初期臨床研修医1年目・中西 一貴

8月に多職種連携およびスキルアップの一環として、有志の臨床検査技師の方々と研修医にて、ルートとエコーの勉強会を行いました。近頃の法改正により、臨床検査技師の皆さんもルートの確保ができるようになりました。そこで、臨床検査技師の皆さんに研修医がルートの手技をお教えし、その代わりに臨床検査技師の皆さんに心エコーを教えていただくという勉強会を開催しました。



勉強会の様子

実際にルートのコツを言語化することで改めて意識すべきことを再確認できましたし、これまでだいたいの動きを見られたら満足していた心エコーも、壁運動の見方や深呼吸の活用の仕方など、細かな学習点がたくさんあることを学びました。また何より、普段から数多く検査を依頼させていただいている臨床検査技師の皆さんと交流の機会を得られたということが貴重な経験でした。今後もこのような多職種連携の機会を増やしていきたいと考えています。ご協力いただいた臨床検査技師の皆様、ありがとうございました。

研究所部門シリーズ
No.16

感染病態研究部

感染病態研究部では、ウイルス性肝炎、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の病態解明と治療法の開発を行っています。

B型肝炎ウイルス（HBV）に対しては、HBVの複製機序、病態進展に関わる肝実質、非実質細胞の相互作用について、解明を進めています。現在はシングルセルレベルでの解析を得意としており、多くの共同研究をしています。また、従来のin vitro、in vivo解析に加えて、ヒトとウイルスの相互作用をゲノム配列の面からも検討を行うという、新しい取り組みも進めています。

COVID-19に対しては、重症化機序の解明と、後遺症の各症状が発症する機序と治療法の解明を進めています。また、COVID-19の流行時に

話題となった小児多系統炎症性症候群（MIS-C）の病態解明にも取り組み、診断、治療の手法について研究を進めています。

我々は、これらの感染症の病態を解明することにより、有効な治療標的を見出し、治療薬の開発につなげていきます。

（部長 杉山 真也）



今年のヨーロッパ肝臓学会(ウーン)で発表してきました。

研究所部門シリーズ
No.17

メディカルゲノムセンター(MGC)



MGCスタッフによる
遺伝カウンセリングの風景

MGCは、2016年4月に発足したゲノム医療の開発・推進（医学研究と臨床活用の両方）を行う組織であり、センター病院臨床ゲノム科と連携して実地医療に寄与しています。

従来、遺伝子検査、遺伝医療と

という言葉が汎用されてきましたが、大まかに言えば、その発展版が、ゲノム検査、ゲノム医療です。遺伝子検査は、特定の遺伝子のDNA断片を調べるもので、主に遺伝性疾患を対象とします。一方、ゲノム検査は、ゲノム情報を対象にして、注目する病気に関わるバリエーション（群）を網羅的に探索するものであり、生活習慣病を含む、より広い疾患群を対象とします。

MGCは、国内外のゲノム研究開発やゲノム医療の進捗状況に合わせて、多様な課題に対し、戦略的、かつスピード感をもって取り組んでいます。

（センター長 加藤 規弘）

研究所部門シリーズ
No.18

呼吸器系ウイルス感染症研究部

ウイルス感染症の世界的大流行（パンデミック）は、健康被害のみならず社会経済活動に甚大な被害をもたらします。当研究部では、インフルエンザウイルス、高病原性鳥インフルエンザウイルス、新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）などの呼吸器系ウイルスをモデルに、ウイルスの感染動物モデルにおける病原性・増殖性・伝播性の解析、動物モデルを用いたウイルス感染に対する生体応答の解析、ウイルスに対する薬剤とワクチンの開発、並びにそれらの動物モデルを用いた評価など多岐にわたる研究を進めています。

2020年にパンデミックを引き起こしたSARS-CoV-2に関する研究では、同感染症（COVID-19）の動

物モデルの確立、動物モデルを用いたSARS-CoV-2変異株の性状解明、さらにSARS-CoV-2感染肺における生体応答の解明を行うなど、多くの研究成果を挙げてきました。今後も当研究部は、呼吸器系ウイルス感染症の制御に資する研究開発を推進します。（部長 今井 正樹）



2光子顕微鏡を用いて、ウイルス感染肺を観察する植木紘史上級研究員

研究所部門シリーズ
No.19

ウイルス感染動態研究部



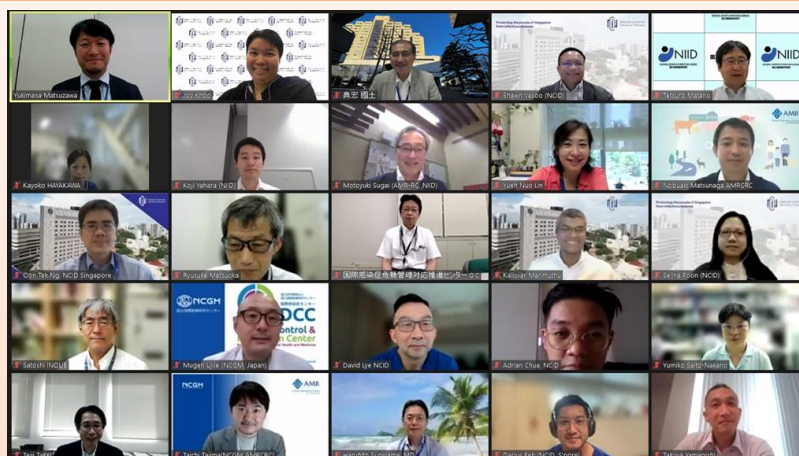
P3実験室に入室する前の浦木研究員と古澤研究員

ヒトで流行を続けるウイルスには、それを可能にする巧妙な仕掛けが隠されています。その一端を明らかにすることで、ウイルスの増殖メカニズムを分子レベル・細胞レベル・個体レベル・コミュニティレベルで理解し、ウイルス感染症を制御可能なものにすることを目指してい

ます。それに向けて、インフルエンザウイルスや新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）、エンテロウイルス、アデノ随伴ウイルス（AAV）などを研究対象として、研究部のメンバーがそれぞれ研究を進めています。特に、インフルエンザウイルス、新型コロナウイルスやエンテロウイルスに対するワクチンの基礎的研究や開発、抗ウイルス薬耐性インフルエンザウイルスや新型コロナウイルスの性状解析、新型コロナウイルスのウイルス蛋白質の機能解析ならびにアデノ随伴ウイルス（AAV）の生体内における感染動態の解析を中心的なテーマとし、呼吸器感染症研究部と協力して実験を行っています。

（部長 山吉 誠也）

9月28日、第2回NCID-NIID-NCGM合同シンポジウムが開催されました



3機関の登壇者、関係者との記念撮影

感染予防管理（IPC; Infection Prevention and Control）と薬剤耐性（AMR; Antimicrobial Resistance）をテーマとして、第2回NCGM-NIID-NCID合同シンポジウムがオンラインにて開催されました。国立国際医療研究センター（NCGM; National Center for Global Health and Medicine）は感染症患者の診療、臨床研究、国際協力、研修活動に重点を置き、国立感染症研究所（NIID; National Institute of Infectious Disease）は感染症に係わる基礎研究、リファレンス業務、サーベイランス、検定・検査に関連する機能を有しております。また、シンガポール国立感染症センター（NCID; National Centre for Infectious Diseases）は、臨床、公衆衛生、研究、研修・教育、コミュニティエンゲージメントの各機能が統合された1つの包括的な組織です。具体的には、感染症診療及びアウトブレイク対応の部門に加え、公衆衛生・疫学部門、検査部門、感染症研究・研修部門、AMR調整部門、HIV、結核プログラムの部門にて構成されています。

この合同シンポジウムにて、IPCとAMRに関する各センターでの戦略について学ぶことができました。三機関の感染症専門家が、IPC及びAMRサーベイランスやワンヘルスサーベイランス、AMR研究体制について講演を行いました。また、IPC及びAMR分野での研究、ゲノムサーベイランスでの今後の二国間協力の可能性についても議論されました。

COVID-19パンデミック時の教訓から、日本はサーベイランスと研究を臨床部門とよりよく統合することで、新興・再興感染症への対応を強化している、と高い評価をいただきました。

シンポジウムにはシンガポールと日本の双方から80人以上が参加しました。今後もこのようなシンポジウムや勉強会を開催し、共同研究プロジェクト、知識・情報・経験の共有、二国間での研修や専門家の教育など、さらなる協力関係を築いていきたいと考えます。

第31回日本抗ウイルス療法学会総会・学術集会を肝疾患研究部が主催しました

(寄稿)肝疾患研究部 肝疾患先端治療研究室長 由雄祥代

肝炎・免疫研究センター 研究センター長 考藤 達哉先生を会長とし、2023年9月14-16日に横浜シンポジアで第31回日本抗ウイルス療法学会総会・学術集会を開催しました。

肝疾患研究部主催、感染病態研究部と難治性ウイルス感染症研究部にお手伝いいただきました。HIV、COVID-19、肝炎を主とするさまざまなウイルス疾患研究に関わる基礎研究者、臨床医たちの異分野交流により白熱した議論が行われ、新たな共同研究の芽がうまれました。

第31回の初の試みとして、若手も楽しむことができる学会を目指して設けた若手セッションには多数の応募をいただきました。

本学会の理事長を昨年まで15年間歴任された研究所長の満屋裕明先生がとても楽しそうに若手の研究発表を聞いてくださっていたのも印象的でした。これからも、若手も先輩も皆が楽しめる学会であり続けてほしいと思いました。



このだい
通信

第119回日本精神神経学会学術総会(横浜)で優秀発表賞(研修医・専攻医セッション)を受賞して (寄稿)国府台病院心療内科レジデント1年目 雨宮 大晟

この度、学会で「レセプト情報・特定健診等情報データベース(NDB)オープンデータを用いた電気痙攣療法の臨床疫学」という演題で優秀発表賞をいただくことができました。研修医の時に研究に誘って下さった総合内科の酒匂先生をはじめとし、精神科の先生方など、未熟な私に手厚くご指導いただき心より感謝しております。発表準備を通して学んだことやディスカッションも含めて今後の実臨床に生かせるよう精進したいと思います。また本研究はウィーンで行われるWorld Congress of Psychiatryでも発表予

定で、さらに論文としても発表できるよう励んで参ります。改めてご指導いただいた先生方に御礼申し上げます。



(左)酒匂 赤人 先生 (右)雨宮 大晟 先生

アジア太平洋動脈学会で若手研究奨励賞、日本動脈硬化学会からトラベルグラントを受賞して

(寄稿)国府台病院糖尿病内科医師 箱島 真理子

マレーシアの首都クアラルンプールで開催されたアジア太平洋動脈硬化学会に参加し、ペマフィブラートのNAFLDへの影響に関して発表しました。

とてもアットホームな学会で、座長や現地の先生方が積極的に話しかけてくださり、和やかな雰囲気の中で発表をすることができ、光栄なことに、同学会から若手研究奨励賞を、日本動脈硬化学会からトラベルグラントを受賞しました。

シンポジウムでは現地マレーシアにおける食習慣と糖尿病有病率や平均寿命との関連、家族性高コレステロール血症についての各国の対策の違い、スクリーニング検査や費用の問題など、多彩なテーマが取り上げられおり、地域の状況を踏まえた対策の重要性を痛感すると共に、研究をどのように展開するかを考える契機となりました。今後の研究に活かしていきたいと思えます。



箱島医師

10月5日、韓国使節団がNCGMを訪問しました

韓国の国立ソウル大学ブントアン病院（SNUBH; Seoul National University Bundang Hospital）、国立中央医療院（NMC: National Medical Center）、韓国疾病管理庁（KDCA; Korean Disease Control and Prevention Agency）からの使節団5名が、国際感染症センター（DCC; Disease Control and prevention Center）を来訪し、日



国土理事長の表敬訪問

本の新興・再興感染症対策や取り組みについての紹介・視察、及び情報・意見交換を行いました。また、国土理事長への表敬も行いました。

会議では、SNUBH、NCGMの相互紹介、「韓国のCOVID-19振り返りと医療システムの変遷」について講演を伺うとともに、大曲貴夫DCCセンター長より「日本におけるCOVID-19の振り返りと今後の新興・再興感染症対策」、秋山裕太郎医師、守山祐樹医師より「国内の訓練・キャパシティビルディング」、齋藤翔医師より「COVID-19パンデミック時における臨床研究」についてそれぞれ講演を行い、国際感染症危機管理対応推進センター（GIC; Global outbreak Intelligence, capacity building and deployment coordination Center）長の氏家無限医師も参加し、GIC運営室長の松澤幸正医師の司会のもと、各々のトピックに対して大変活発な議論が繰り広げられました。

また、救急外来、及び国際感染症センター新感染症病棟にて、野本英俊医師の案内・解説のもと、患者搬送の動線・手段・手順、ならびに新感染症病棟設備等の視察をしました。本訪問では、新興・再興感染症対策において、韓国と日本双方の臨床施設、ならびに感染症専門家に多くの共通の課題があることがわかり、今後の更なる連携協力の重要性が改めて確認されました。



会議後の集合写真



新感染症病棟での視察の様子

第6回GHM Club Workshopが開催されました



満屋研究所長からは論文のクオリティアップについてのお話をいただきました

NCGM発の英文学術誌「Global Health & Medicine (GHM)」創刊4周年を機に、10月10日(火)、第6回GHM Club Workshopが盛大に開催されました。センター病院、研究所、臨床研究センター、国府台病院から多くの研究者が集まったほか、外部の東京大学からも多くの方の参加を得て、英文論文の投稿を推奨・支援し、今後の雑誌の方向性について議論するWorkshopとなりました。

国土典宏理事長からはNCGMが英文学術誌を発行する意義、また満屋裕明研究所長からは論文のクオリティアップについてのお話をいただきました。その後、話題提供として施 智甜氏（中国昆明医科

大学第二附属病院 肝胆外科医）より「中国における胆石治療の現状と今後の展望」の講演が行われました。続いて宋培培GHM室長からGHMが取得したIF（インパクトファクター）の経緯と今後の課題について説明がなされました。

後半は、参加者の皆さんからGHMへのご意見を伺ったほか、親睦を深めると同時に研究についての情報交換が盛んに行われていました。

司会進行は廣井透雄先生、そして武井貞治戦略局長が閉会の辞として、研究者同士のネットワークづくりが大切であると述べ、散会となりました。



国土理事長からは、GHM出版の意義が述べられました



施氏から中国の胆石治療について、貴重な講演がなされました

WHO GOARN Tier 3.0リーダーシップ研修に参加しました (寄稿)国際感染症危機管理対応推進センター運営室長 松澤 幸正

NCGM/DCCでは、WHO、厚生労働省、日本国内のパートナー機関と協働のもと、GOARN (Global Outbreak Alert Response Network) Tier 1.5ワークショップを2019年より毎年開催し、日本における感染症人材育成に貢献してきました。

今回、2023年9月18日～22日、ドイツベルリンで開催された、経験豊富な公衆衛生アウト



WHO西太平洋地域からのほか参加者と

ブレイク担当者向けの第1回GOARN Tier 3.0 Outbreak Response Leadership Training Programmeに、国際感染症危機管理対応推進センター 松澤幸正運営室長が参加いたしました。同研修は、WHOパートナーシップのもと、ドイツのRobert Koch研究所が主催する、公衆衛生アウトブレイク対応のためのリーダーシップを教育するための5日間のプログラムで、WHOの全地域（コンゴ民主共和国、セネガル、ウガンダ、中央アフリカ共和国、ブルキナファソ、ヨルダン、パキスタン、チュニジア、ドイツ、モルドバ、オランダ、ポルトガル、イギリス、スウェーデン、ブラジル、パナマ、米国、ナイジェリア、ネパール、バングラデシュ、オーストラリア、フィリピン、日本）から計23名が参集しました。

この5日間の対面式トレーニングでは、各国の経験豊富な公衆衛生アウトブレイク対応者が、公衆衛生緊急時に影響力を持ち、信頼されるリーダーとなれるよう、個人および集団におけるリーダーシップ・スキルを強化することを目的として行われました。トレーニングの中で、参加者は、高度な状況認識能力、相反する事象の解決方法、境界を越えて主要なステークホルダーと信頼関係を構築する技術、集団での意思決定



ロベルト・コッホの胸像の前で

に影響を与える方法など、リーダーシップとしての考え方や実践スキルを開発しました。また、5日間にわたる研修の中では、数多くのグループワークがあり、チームビルディングの重要性を実感しながら、各国の公衆衛生リーダーとのより強固なネットワークを形成することができ、今後の更なる国際連携・国際貢献に資する大変良い機会となりました。

今後も、WHO、厚生労働省、国内外のパートナー機関とともに、国際連携・支援、感染症人材育成に貢献してまいります。

10月29日、センター病院でブラック・ジャックセミナーを開催しました

新型コロナウイルスの影響により、4年ぶりの開催となりました。

本セミナーはジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社との共催で、中学生を対象にしています。本物の医療機器を用いて、病院で勤務する外科医の仕事を体験することができます。

当日は28名の参加があり、希望者はガウンを着用し、セミナーに参加しました。セミナーでは、センター病院外科医師の協力のもと、手術縫合体験、最新医療機器体験（超音波メス）、内視鏡トレーニング体験、自動吻合器・縫合器体験、外科医との対談を行いました。

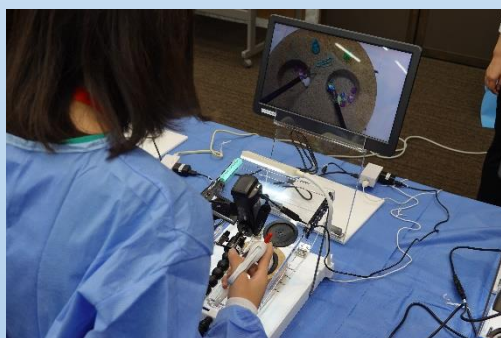
参加者からは「普段体験することのできない体験ができ、とても楽しかった」「分からない部分は気楽に医師に質問できてよかった」「医療関係の仕事に興味を持つことができた」と満足した様子でコメントしました。



手術縫合体験



最新医療機器体験



内視鏡トレーニング体験



自動吻合器・縫合器体験



外科医との対談



参加者へ向けて
閉会の挨拶を述べる国土理事長

11月3日、NHK総合テレビ「病院ラジオ センター病院編」が放送されました！



センター病院アトリウムに設置されたラジオブース

7月、センター病院のアトリウムで院内感染管理室の監修のもと、収録が行われました。

本番組は、サンドウィッチマンが病院に出張ラジオ局を開設し、患者や家族の本音をリクエスト曲とともに聞いていくドキュメンタリーです。

冒頭では、「全ての診療分野で専門スタッフが連携し、高度な医療を行う総合病院で、身近な病気から国際的に脅威となる感染症までさまざまな疾患に対応。また、外国人の診察をサポートする医療通訳者が常駐しています。」とセンター病院が紹介されました。

外国人患者、100万人に1人が発症する難病の患者などさまざまな患者が出演し、涙と笑いのある番組となりました。

本号に掲載の集合写真等は、撮影時のみマスクを外しています。



企画・発行：
NCGM 広報企画室



https://www.ncgm.go.jp/aboutus/FeeltheNCGM_Plus/index.html

バックナンバーはこちらからご覧いただけます。